

第625回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2020年8月度 ——

◇ 議題

<テレビ番組>

「良心の実弾～医師・中村哲が遺したもの～」

放送日：5月29日（金）午前10時10分～午前11時05分

8月度（第625回）九州朝日放送番組審議会は、「新型コロナウイルス」感染拡大防止の観点から、委員からの課題番組に対するレポート提出により開催とした

九州朝日放送株式会社

第625回 番組審議会議事録

【はじめに】

「新型コロナウイルス」感染拡大の影響により、2020年4月に福岡県を含む7都道府県に緊急事態宣言が発出され、KBCでは4月度の番組審議会を「休会」とした。5月度、6月度はテレビ会議システムを利用したリモート開催、7月度は三密回避の観点から通常より広い会議室にて開催した。しかしながら、番組審議会は年10回の開催が義務付けられていることから、8月度（第625回）九州朝日放送番組審議会は、委員からの課題番組に対するレポート提出により開催とした。各委員からのレポートは事務局に提出され、番組制作担当者が閲覧・回答文を作成。事務局が質疑の形式にまとめた。

1. レポート提出締切日 2020年8月14日(金)
2. 審議の方式 課題番組に対するレポートの提出
3. 委員の総数 7名

委員長	池田 勝
副委員長	戸田 康一郎
委員	守田 有理子
委員	赤木 由美
委員	山崎 靖
委員	中山 裕二
委員	石井 靖子

放送事業者側

代表取締役社長	和氣 靖
常務取締役	笹栗 哲朗
総合編成局長兼ラジオ局長	坂井 剛
報道情報局長	柴田 高宏
報道情報局 解説委員長（プロデューサー）	臼井 賢一郎
報道情報局（ディレクター）	河村 聡
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	石橋 聡
番組審議会事務局（視聴者・広報室）	松永 俊郎

4. 議 題

- (1) テレビ番組「良心の実弾～医師・中村哲が遺したもの～」
　　＜放送日＞ 5月29日（金）午前10時10分～午前11時05
- (2) 8月・9月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 7月 視聴者・聴取者応答状況の報告

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

- 長く人道支援を続け、偉大な功績を残された中村哲さんに関する番組を地元の放送局であるKBCが制作したことは意義がある。中村さんがどのような人物でどのような功績をあげられたのか大変分かりやすい番組となっていた。全てにおいて先を見据えた中村さんの行動にとっても感銘を受けた。
- 以前から中村さん取材してきた経緯があり、その素材があったからこのような番組ができたとのこと。30年近く経過し、中村さんの功績を伝える番組として活かされていたことは、悲しくはあるが、とてもすばらしいことだと思った。一方、番組タイトル「良心の実弾」は、少し違和感があった。
- 中村さんと活動を共にした仲間や中学校時代の同級生など、様々な立場の方からのインタビューを交えた番組構成は地元局ならではのネットワークを活かしたもので、視聴者がより身近に感じられ心に響く番組だったと思う。現地の将来を見据えた事業を指揮する中村さんのスケールの大きさに圧倒された。
- 番組は中村さんの死や紛争地区の悲惨さという悲しい現実だけではなく、アフガニスタンの未来という一筋の灯りのようなものも内在しているように感じた。今後もこのような番組作りを通して、KBCにはメディアとしての重要な役割を果たし続けていただきたい。
- 中村さんのインタビューにあった「日本に帰っても役に立てない」というフレーズからは、私たちと変わらない人間味あふれる弱さもさらけ出しての言葉だったので、逆に勇気をもられたような気持ちになった。
- 約1時間の長さでよくまとまっており、とても良い番組に仕上がっていたが、壮大なドラマが短時間に凝縮されているので、いくつかの疑問点が残った。中村さんの意志が数年後にどうやって引き継がれたかも含めて、続編を期待している。
- 色々な立場の方の証言から中村さんの人物像を浮き彫りにしようとした試みは理解できるが、登場人物が多すぎたと思う。結果的にこの番組で一番伝えなかったことが何なのかよく分からなくなってしまったように思われた。

などの評価や批評、提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

(担当ディレクター)

- 中村さんの功績や生涯については語りつくされている。数多くの番組ですでに描かれている中村さんを取り上げるのは、非常に難しい作業だった。その功績をたどるだけでも55分の番組枠が埋まってしまうかねないことも悩みの種だった。
- 番組タイトルは、1988年のペシャワール会報によせた中村さんの言葉からの引用。「実弾」という言葉が(去年12月の銃撃)事件を連想させるとの懸念もあったが、中村さんを象徴するこれ以上ない言葉だと思いタイトルに選んだ。
- インタビューの場面では、それぞれの証言を浮かび上がらせる目的で色のついた照明や(普段はあまり使わない)真正面にカメラを構える構図などの工夫をした。ただし、紫のライトは現場でモニターしていた以上に色が濃く出た。外光の変化も影響した。
- 用水路建設の過程にあった試行錯誤、中村さんの生い立ち、反戦への思いなど、他にも描きたい要素はあった。特に「中村さんの意志を継ぐ者たちの動き」はもっとしっかりと描きたかった。今後も長期的に取材を重ね、ぜひ番組にできればと考えている。

(担当プロデューサー)

- 本格的な取材は1992年の夏ごろから。アフガニスタンで医療活動に従事する中村さんが一時帰国していた際に訪ね、日本のメディアとして最初となる現地密着取材の許可を得た。電気もない山岳地帯の無医村地区での診療の様子など、移動だけでも大変な時間を要する印象深い取材が続いた。
- 中村さんには、当時から気負った様子はなく、恬淡としながら、現地の人々の安寧な生活をひたすら願い、現地と共に生きるという強固な姿勢が伺えた。国際貢献というありきたりな言葉が霞んでしまう、中村さんの本質を追求する行動に深くうなずかされた。
- 今回の番組制作にあたり、活動初期を知る放送局として、人々は「中村哲」の何に魅了されるのかを掘ることに徹し、中村さんのリアルに少しでも迫りたいと考えた。中村さんと共に歩んだ藤田さんへのインタビューからは、変わる事のない生き方を貫いた中村さんの凄みと改めて敬意の念を覚えた。
- 中村さんが遺した多くの偉業、言葉、中村さんが束ねた「人々の良心」はこれからも語り継がれていくべきもの。引き継がれたペシャワール会の事業の取材を重ね、地元の放送局としての責任を果たしていきたい。

などの説明をしました。